



表紙写真 二重網内の坪刈り調査

目 次

- ◎ 農林水産研究指導センター 水産研究部部長 新年度のごあいさつ 1
- ◎ 各担当、チームのトピックス
 - ・ 佐伯湾奥の水温は上昇しているのか？
(水産研究部 資源増殖チーム) 2
 - ・ 魚病棟がリニューアルしました！
(水産研究部 養殖環境チーム) 5
 - ・ 二重網を用いたアサリ増殖試験
(北部水産グループ 資源増殖チーム) 6
 - ・ 2025年夏、高水温によるクロメ衰弱の経過
(北部水産グループ 養殖環境チーム) 8
- ◎ 浜からのたより
 - ・ くにさき銀たち 回復の兆し
(東部振興局 水産班) 10
 - ・ 祝！第64回全国農林水産祭 浪井丸天水産 天皇杯受賞
(南部振興局 水産班) 11
- ◎ 転入者紹介 14
- ◎ 令和8度 水産研究部のスタッフ及び担当業務 16
- ◎ 人権コーナー 17



農林水産研究指導センター
水産研究部長
倉橋 賢二郎

日頃より当水産研究部の活動にご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、近年の世界情勢は、長期化するウクライナ戦争や中東情勢の悪化などにより、予測が難しい不安定な状態が続いています。また、地球温暖化対策は待ったなしの課題ですが、各国の協力がなかなか進んでいないのが現状です。そのほかにも生成AIなどの技術革新が急速に進んでおり、私たちは変化の激しい時代を生きています。

国内の水産業に目を向けると、担い手の高齢化や後継者不足、燃油や生産資材、飼料の高騰、気候変動による漁場環境の変化など非常に厳しい状況にあります。このような中、当研究部としましては、現場のニーズを的確に把握し、技術革新へのチャレンジ精神を持って課題解決に取り組み、研究成果を迅速に皆さまにお届けできるよう努めてまいります。

当研究部の主要な研究課題について紹介します。1つ目は「養殖魚の安定生産に向けた疾病防除技術の開発」です。大分県の海面漁業産出額は366億円で、その約7割を養殖業が占めています。(令和6年漁業産出額(農林水産省)) ワクチンの普及により一部の病気による漁業被害は減少傾向にありますが、これまで確認されなかった新しい病気の発生やブリ類、ヒラメ、トラフグでは、まだワクチンがない病気による被害が出ています。新しい病気については、原因究明と病気を防除する養殖手法の開発に取り組みます。ワクチンが開発されていない病気としては、ヒラメのエドワジエラ症、ブリ類のノカルジア症があります。これらの病気に効果的なワクチンの開発に取り組みます。また、トラフグの陸上養殖で多く発生するエラムシ症は、寄生虫が原因であ

るためワクチンでは防げません。対策として薬浴が行われていますが、手間とコストを改善するための新たな防除技術の開発に取り組みます。

2つ目は、「人工種苗を活用した養殖ブリ周年出荷体制の確立」です。大分県ではブリ養殖が盛んに行われています。通常、4～5月頃に採れる天然の種苗を育て、1年半を経過した10～3月にその多くを出荷します。養殖を始めて1年後の4～6月は出荷するには魚体が小さく、2年後では産卵のために痩せてしまい、身質が低下してしまいます。そこで、この出荷端境期を解消するため、天然ブリと産卵期を約半年ずらした8月採卵の人工種苗、さらに2カ月遅い10月採卵の人工種苗を生産し、養殖試験を行っています。4～6月の出荷端境期に、比較的産卵の影響が少なく、流通業者からも好評な4kgサイズの生産を目指します。

この他にも漁業調査船「豊洋」を使った調査を行っています。県下沿岸に定点を設け、水温、塩分、窒素やリンなどの栄養塩、魚群の調査などを行っています。調査結果は、海況・魚群速報などとして県のホームページやメール等で関係漁協などへ迅速に情報発信しています。こうした中、近年では海水温の上昇などの漁場環境の変化により魚の種類や分布が変わってきていると予想されます。そこで、環境DNAを用いた調査等を行い、南方系魚種の出現状況などの把握に取り組んでいます。

これからも大分の豊かな海を次世代へと引き継ぐため、漁業現場に寄り添った技術開発にまい進してまいります。皆様の期待に応えられるよう、日々研鑽を重ねてまいりますので、今後ともよろしく願います。

佐伯湾奥の水温は上昇しているのか？

資源増殖チーム 研究員 渡邊 千夏

日本近海における 2024 年までの海域平均海面水温（年平均）の上昇率は、100 年あたり+1.33℃の割合となっています。この上昇率は、世界全体で平均した海面水温の上昇率（100 年あたり+0.62℃）よりも大きく、日本の気温の上昇率（100 年あたり+1.40℃）と同程度の値です¹⁾。そこで、水産研究部が位置する佐伯湾奥でも海水温が上昇傾向にあるのかどうか、佐伯市上浦地先の海水温の変化について調査を行ったのでご報告します。

水産研究部では、平日毎朝に佐伯市上浦の浅海井漁港（図 1）にて表層の海水温を測定しています。この観測はおよそ 50 年前から続いており、現在も継続して測定を行っています。ここでは 1977 年から 2024 年までの 48 年間（延べ 576 か月）を対象として、月別平均水温を求め、佐伯湾奥の表層水温の長期変動について解析しました。ただし、土日祝日や荒天日には測定ができないため、線形補間によって欠測日の値を求めました。

水温の年別平均値の推移を図 2 に示しました。これを見ると、表層水温は数年おきに上下動を繰り返しながら、長期的には上昇傾向にあることがわかります。この上昇率を見積もると、1 年間で約 0.021℃上昇しており、延べ 48 年間で約 1.0℃上昇している計算になります。また、1～3 月を冬、4～6 月を春、7～9 月を夏、10～12 月を秋として、季節ごとの平均水温の年変化について検討しました（図 3）。1 年間で水温の変化率は、冬と春が +0.021℃、夏が +0.022℃、秋が +0.020℃でした。日本近海の海面水温の上昇率は、多くの海域で秋季・冬季に大きくなり、夏季に小さくなる傾向がみられます¹⁾が、今回の結果では季節差は確認されませんでした。

水温と同時期の佐伯市の気温についても解析を行いました。気温の年別平均値の推移を図 4 に示しました。結果を見ると、気温も水温と同様に長期的な上昇傾向にあることがわかります。また、水温と気温の月別偏差の 12 か月移動平均*の比較を図 5 に示しました。その間には高い相関（相関係数 $r^{**}=0.88$ ）がみられ、水温の変動は気温に影響を受けている可能性が示唆されました。

以上のことから、1977 年から 2024 年までの佐伯湾奥の表層海水温は長期的に上昇傾向にあることがわかりました。また、その上昇傾向は気温に影響されているものと考えられます。海水温の変動が海洋生物に及ぼす影響は大きいと考えられます。令和 6 年度発行のアクアニュース No. 61 でご紹介した「テンジクタチ」のように、南方系の魚も見られるようになってきました。漁獲物の動向を把握するためにも、今後も海水温の変動について調査を続けていきます。

*12 か月移動平均：時系列データから季節成分を取り除くために、12 か月分の平均値を求めること。

**相関係数 r ：2 つのデータの関係を示す指標。値が 1 に近いほど正の相関が強く、0 に近いほど相関が弱いといえる。

参考文献

1) 気象庁：海洋の健康診断表（2024 年）

https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/shindan/a_1/japan_warm/japan_warm.html

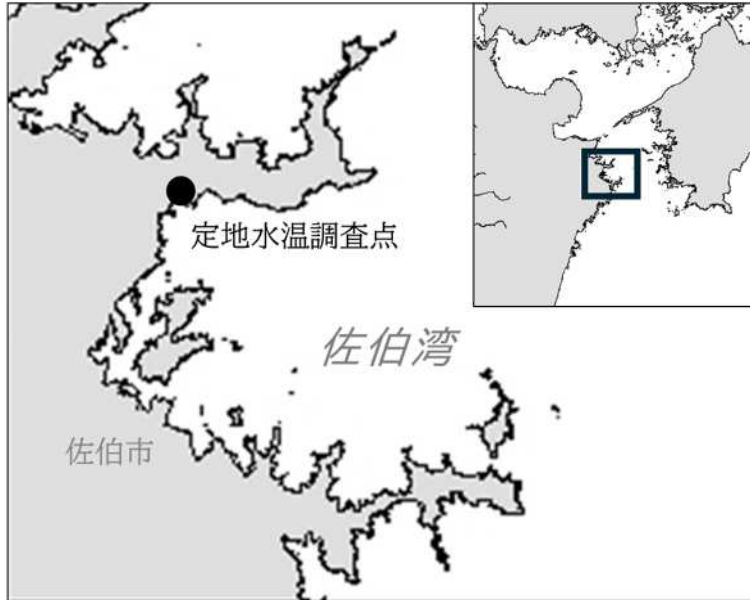


図1 定地水温調査点

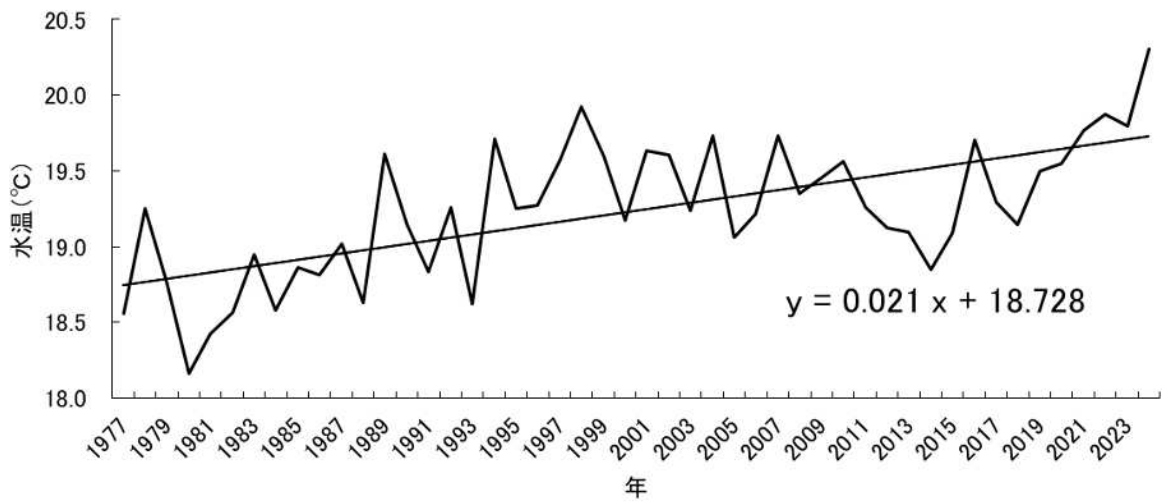


図2 表層水温の長期変動

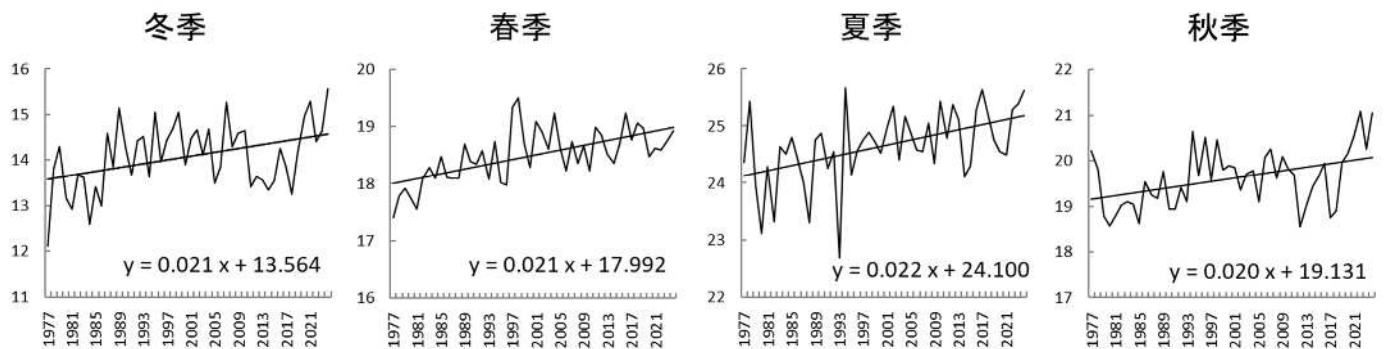


図3 季節ごとの水温の変化率

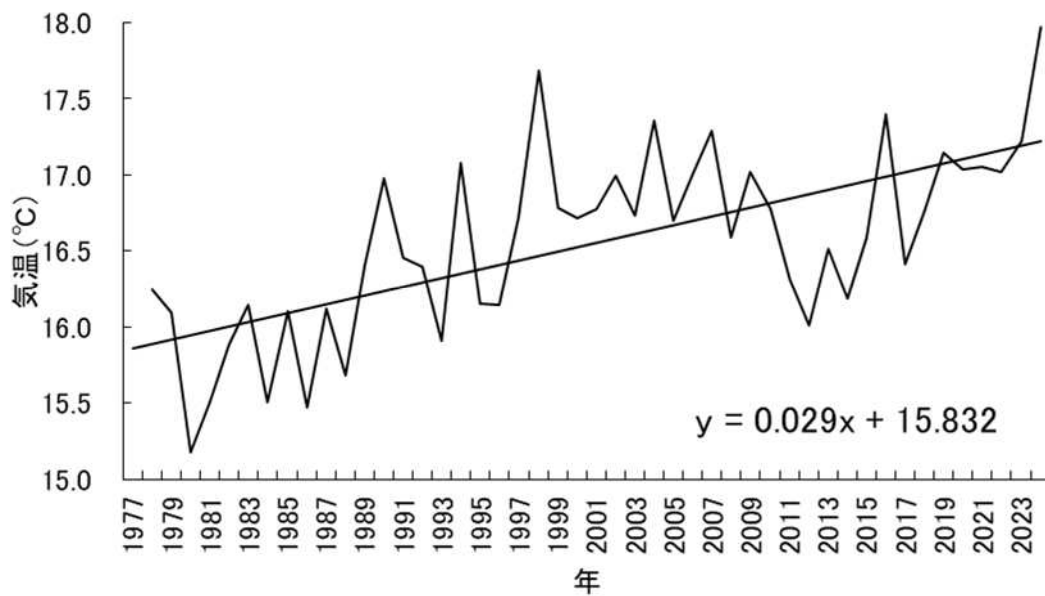


図4 佐伯市の気温の長期変動

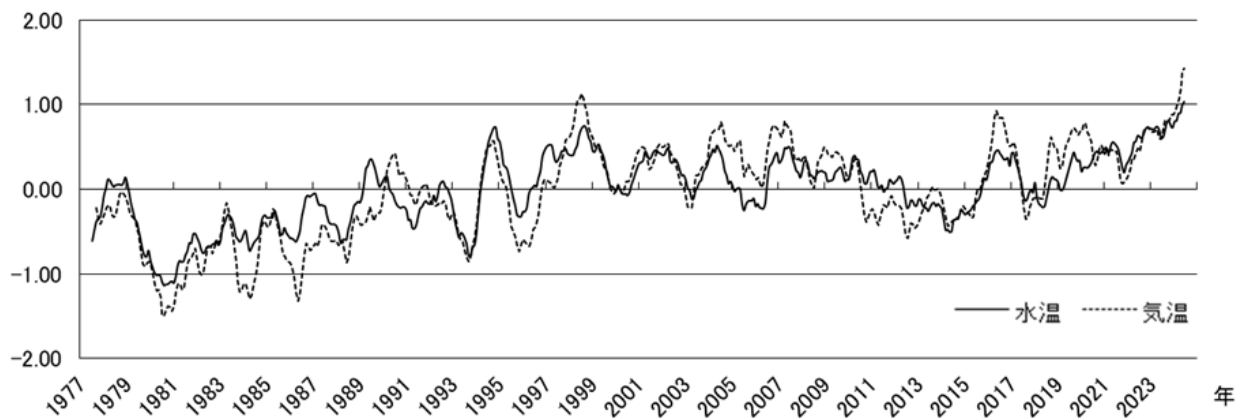


図5 水温と気温の月別偏差の12か月移動平均

魚病棟がリニューアルしました！

養殖環境チーム 主幹研究員 三吉泰之

はじめに

養殖環境チーム魚病班では、養殖魚介類で発生する病気の診断や防除技術開発の研究業務に加え、養殖生産者に対し、水産用医薬品の適正使用の指導業務を行っています。私たちが主な業務を行う魚病棟は、1983年（昭和58年）に整備され、これまで多くの疾病診断や各種実験等を行ってきました。しかし、築40年超えとなり老朽化が進み、業務に支障を来すことも出てきました。そこで、令和7年8月から改修工事に着手し、今年3月に改修工事が完了、リニューアルされました（写真1）。この機会に魚病班が担当する業務についてご紹介します。



写真1 リニューアルした魚病棟の外観

病気の発生・流行を知る（魚病診断）

養殖生産中には、飼育魚が死亡することがあります。その原因を知るために、生産者からの依頼を受けて魚病診断を行っています。死亡原因として、病原体によるものが大半ですが、環境（水温、酸素量など）の異常や栄養素の過不足等が原因となる場合もあり、現場の状況をよく伺いしながら原因究明を行います。年間約500件の診断を行っており、診断する魚種は、生産量が全国3位のブリ、全国1位のヒラメの順で件数が多く、トラフグやカワハギの診断もあります。診断結果を生産者にお伝えして、投薬による治療などが行われます。

魚病診断は、現場で発生・流行している病気をいち早く把握し、養殖生産地全体への蔓延を防ぐ非常に重要な業務です。

病気を治療する・防ぐ（防除技術の開発）

魚の病気のなかには治療薬がないものがあります。特にヒラメ養殖では使用できる薬が少ないことから、現場での対策が困難な場合があります。そこで私たちは、令和5年度から3か年かけて製薬会社と共同で治療薬の試験を行いました。少しでも早く現場で使用できるように引き続き取り組みを進めます。

また、病気の予防方法として、人と同じように魚でもワクチンが使われており、ブリでは1回の注射で最大5種類の病気について、その被害を減らすことができます。ワクチン接種を進めることは、治療薬の使用量の減少にもつながることから、私たちは、まだワクチンのない病気について開発試験を行っています。

安全・安心を守る（水産用医薬品の適正使用）

養殖生産者がワクチンや抗菌剤を購入する際には、水産研究部が発行した使用指導書が必要となっており、医薬品ごとに対象疾病や使用方法、使用量と期間、出荷までの休薬期間が設定されています。特に抗菌剤については、出荷魚の薬剤残留を防ぐだけでなく、過剰な使用による薬剤耐性菌（AMR）の出現を減らすことが重要です。最近では、ワンヘルス（人、動物、それを取り巻く環境の健康はひとつ）という考え方があり、このなかで薬剤耐性菌対策が特に重要とされています。

私たちは生産者に対し、使用指導書の発行に加え、講習会などの場を通じて水産用医薬品の適正使用の重要性についてお伝えしています。

おわりに

皆さまには、大分県の生産者が大切に育てた美味しい養殖魚を安心してたくさん食べてもらいたいと思います。私たちは、新しくなった魚病棟をフル活用して生産者のお役に立てる研究を行っていききたいと思います。

二重網を用いたアサリ増殖試験

(令和7年度 北部水産グループ 資源増殖チーム)

東部振興局 農山漁村振興部 水産班 高橋杜明

【二重網によるアサリ増殖試験】

近年、豊前海域ではアサリの漁獲量低迷が続いていますが、北部水産グループでは、天然のアサリ稚貝を産卵可能なサイズまで保護し、産卵量を増やすことで資源の回復を目指す試験研究に取り組んでいます。その一環として、図1に示す「二重網」を用いたアサリ稚貝の保護・育成試験を行いましたので、その結果の一部をご紹介します。

二重網は、ネトロン[®]シートとメッシュネットの縁辺を縫い合わせて袋状にしたものです。これを干潟に設置することで、干潟上を流されてきたアサリの幼生や稚貝が自然に二重網内に入り込むため、アサリの保護・育成が可能となります。

今回は、最も良好な結果が得られた中津市高洲での試験結果を示します(図2)。高洲では、令和5年5月に二重網を設置したところ、令和6年3月には二重網内のアサリ生息密度が3,100個/m²に達しました。これは、同時期の二重網外の10倍以上の生息密度です。また、二重網内のアサリは、令和7年10月に平均殻長が30mm以上に成長しており、二重網内で産卵可能なサイズまでアサリが成長したことも確認されました。

【二重網によるアサリ増殖の課題】

ただし、二重網を設置したすべての地点でアサリ稚貝の回収・成長に関して良好な結果が得られたわけではありません。例えば、中津市小祝に設置した二重網では、令和5年7月に発生した豪雨により、二重網を設置した干潟域に土砂が流入・堆積し、二重網内のアサリが大量死してしまいました(図3, 4)。また、高洲に設置した二重網でも、二重網にカキやホトトギスガイ、アオサ等が大量に付着して目詰まりを起こし(図5, 6)、R6年2月から同年5月にかけて、アサリが大きく減耗しています。

【二重網のアサリ増殖への活用】

これまでの試験により、二重網を干潟に設置することで、アサリ稚貝を効率よく保護・育成できることが確認されました。この技術を現場に移転し、豊前海のアサリ資源の回復を目指したいと考えています。しかし、アサリを回収した二重網を長期間同じ場所に置き続けると、土砂の堆積や付着生物の大量発生が起きた場合に、二重網内のアサリが大量死してしまうという課題もあります。そこで、豪雨時に土砂流入の影響を受けやすい河口付近や、付着生物の発生量が多い地点では、二重網内からアサリを取り出し、被害を受けにくい場所に移植する必要があると考えています。アサリの移植先では、アクア・ニュース前号(No. 62)でご紹介した現地養殖の手法で管理することで、二重網で回収したアサリ稚貝を、高い歩留まりで産卵可能なサイズまで育成できるのではないかと考えています。このことについては、今後の試験により、検証を進めたいと考えています。



図1 干潟に設置した二重網

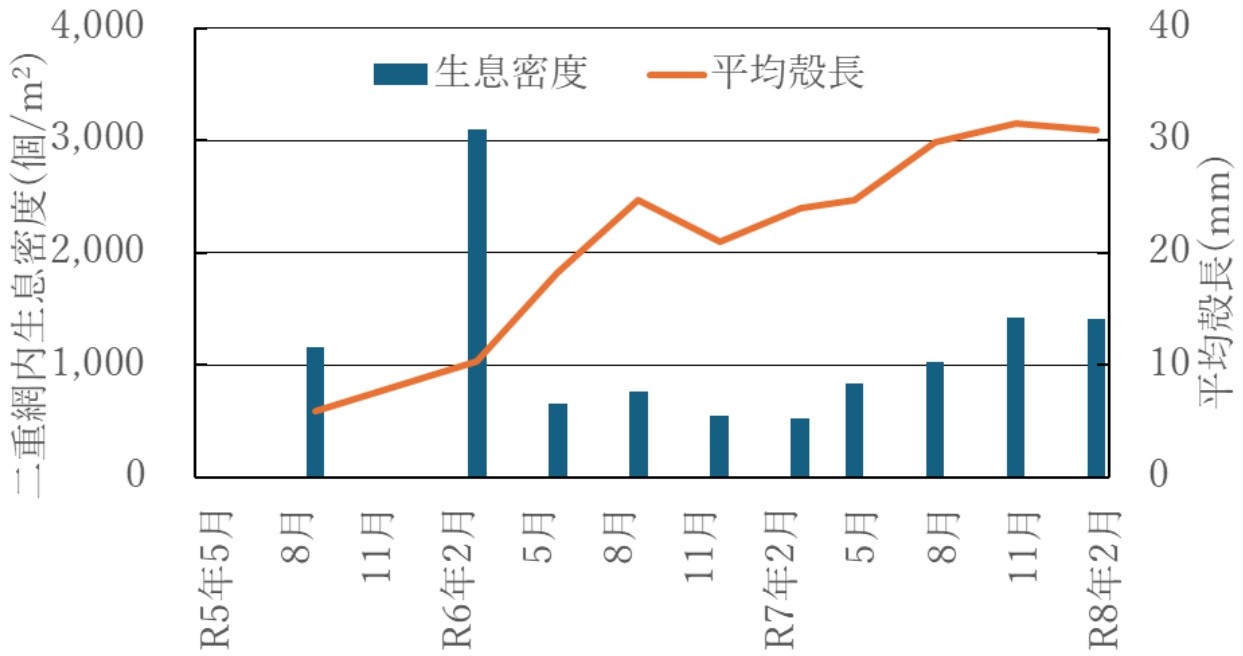


図2 高洲に設置した二重網内のアサリ生息密度及び平均殻長の推移



図3 豪雨後に土砂に埋没した二重網



図4 埋没した二重網から採取されたアサリの死殻



図5 カキが大量に付着した二重網



図6 アオサとホトトギスガイが大量に付着した二重網

2025 年夏、高水温によるクロメ衰弱の経過

水産研究部北部水産グループ 養殖環境チーム 主任研究員 伊藤 龍星

2025 年夏、日本の平均気温はそれまで最高だった過去 2 年（2023・2024 年、平年比+1.76℃）をさらに上回り、1898 年以降で最高（平年比+2.36℃）となりました¹⁾。3 号前の本誌（No. 60、2025. 1 月刊）で、「2024 年夏の記録的高水温と高気温で陸上飼育のカジメ、クロメが枯れました。」と題して、長さ 10~15cm のカジメ、クロメのほとんどが枯死した話をしました。2025 年夏も高水温で、より大きく根や茎もしっかりできたクロメの葉が茎の付け根からポロリと落ちて枯死しました。今回も陸上水槽で観察された現象ですが、実際の海域でも起きていると思いますし、経過観察できる機会も少ないので以下に記載します。

屋外陸上水槽は屋根があり直射日光は当たりません。海水は常時かけ流しています。クロメは 2025 年 1 月初めに姫島産を母藻としたフリー配偶体を室内で受精させて培養を開始、同年 3 月末、長さ 5~10cm の藻体の仮根を輪ゴムで基質（木片）に密着させて屋外水槽へ移しました（写真 1A）。当初弱々しかった仮根も早いものは 2 週間で木片に活着し始め、さらに新たな仮根を出して木片に固着しました（写真 1B）。その後も生長を続け 9 月初めには平均で全長約 230mm、葉体幅 140cm、茎の長さ 4cm となりました（写真 1C）。同時にこの時、茎と葉の付け根部分（ここに生長点があります）の周辺がぼんやりと白っぽくなっていました（写真 1C）。9 月 10 日過ぎには付け根部分はピンポイントで白く柔らかくなり（写真 1D）、葉の部分が下を向く個体も確認されました。

9 月中旬までにバタバタと 66 個体中 29 個体（44%）が枯死しました。症状は、茎と葉の付け根部分が完全にちぎれて葉体は落ち（写真 1E）、残った茎の先端部は腐敗してドロドロしていました（写真 1F）。

図 1 には 2025 年夏季 7~9 月の陸上水槽の 1 時間ごとの水温を示しました。クロメやカジメの生育上限水温は 28℃とされており^{2),3)}、その 1℃上の 29℃に赤点線を記します。8 月初めには一日中 28℃を超えるようになり、お盆前の 8 月 9~12 日には一旦 26~27℃台に低下しましたが、その後再び 28~29℃台に上昇しその状態が 9 月 20 日ごろまで続きました（最高水温は 8 月 24 日 15 時の

30.2℃）。目視観察で軽微な異常が認められたのが 9 月初めであり、お盆過ぎから 2 週間程度経っています。植物なのでリアルタイムでの生死判断は難しいですが、28~29℃の高水温が 2 週間程続いてクロメの生育に支障が生じ、それから 10 日程で茎から葉が落ちたと推測されました。

魚類の食害でクロメの茎だけが林立する写真を度々見かけますが、今回のように高水温で枯死しても同じような状況になること、異常のサインは生長点やその周辺に生じること、葉が落ちたあとの茎は、2 週間程度は先端が白く軟化した状態だがその後なくなり、基質に張り付いた手の指のような部分だけが残存することなどがわかりました。

他県では高水温と食害ですでにカジメ類がほとんど消滅した県もあります。本県沿岸豊後水道北部の夏の海面水温は、その地形が持つ特徴と海水の鉛直混合や底入り潮、底層水の湧昇等^{4,5)}によって、九州西岸や四国、関東の同緯度他県に比べると数℃低くなるため（図 2）、これが幸いして本県では佐賀関高島や津久見無垢島の食べる「くろめ（カジメ）」⁶⁾の生産が維持できていると思います。しかし、本県も南北両方の県境から沿岸の高水温化傾向が顕著になっています。今後も温暖化が続けば、本県のカジメ類の生育はさらに厳しくなります。試験研究機関として、少なくとも種（フリー配偶体）は常に確保しておくこととし、現場での増殖には食害防止策と少しでも水温の低い場所（例えば深場や河口域など）を選ぶこと、また、慎重な議論も必要でしょうが高水温耐性の選抜育種なども必要と考えます。

文 献

- 1) 気象庁 HP 2025 年夏(6 月~8 月)の天候
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/longfcst/seasonal/202508/202508s.html>
- 2) 村瀬 昇. 藻場が消えた?! ~2013 年、夏から秋にかけての山口県日本海沿岸の藻場の異変~. 豊かな海 2014 ; 32 : 67-70.
- 3) 馬場将輔. 温暖化による大型褐藻類の生育反応および

分布変動. 海生研研報 2021 ; 26 : 1-28.

4) 武岡英隆. 豊後水道の急潮と底入り潮. 沿岸海洋研究 2020;58:19-43.

5) 橋本俊也・松田 治・武岡英隆・山本民次・横関恵介. 豊後水道における高栄養底層水の陸棚湧昇. J. Fac. Appl. Biol. Sci. 1995;34:161-165.

6) 伊藤龍星・白樫 真 (2024) 大分県佐賀関の食べる「くろめ」. 藻類, 72, 59.



写真1 陸上水槽のクロメが高水温で衰弱し枯死するまで

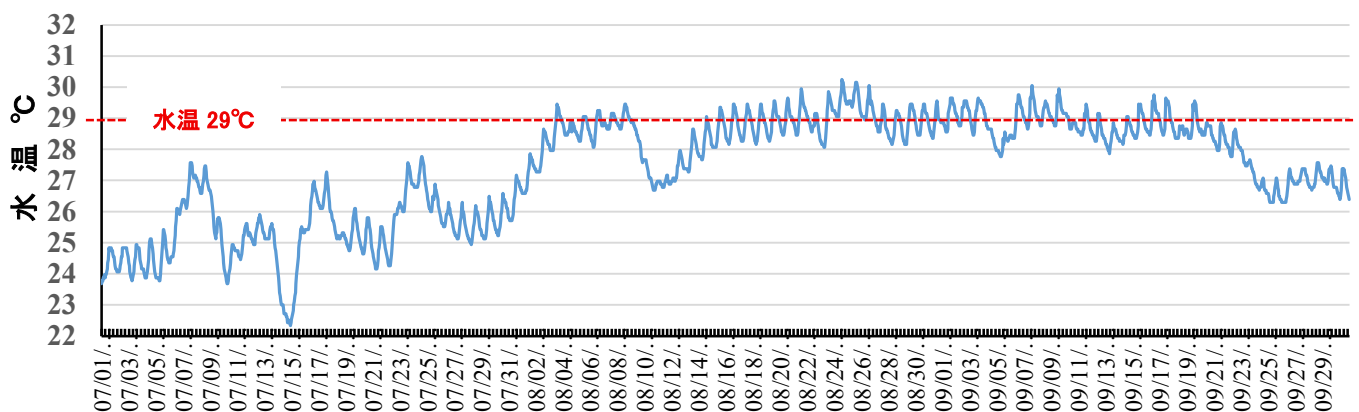


図1 陸上水槽のクロメの水温（2025年7月1日～9月30日）

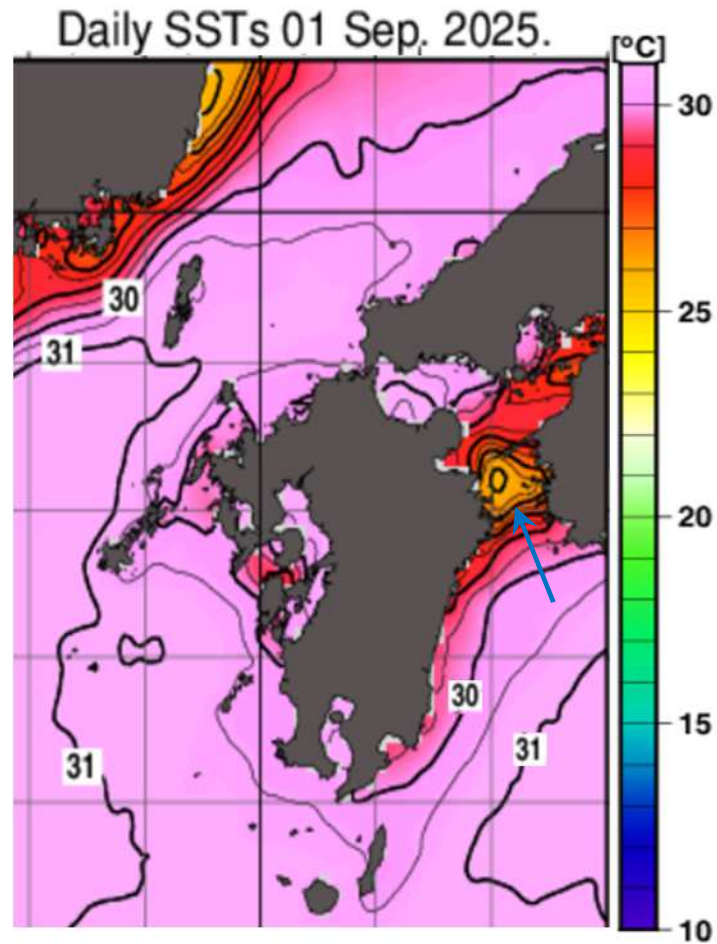


図2 九州・山口県周辺の夏の海面水温（2025年9月1日）
豊後水道北部の水温は周囲や九州西岸よりも低い（青矢印）

気象庁「日別海面水温」(https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/daily/sst_HQ.html)を加工して作成

くにさき銀たち 回復の兆し

(令和7年度 東部振興局 農山漁村振興部 水産班)

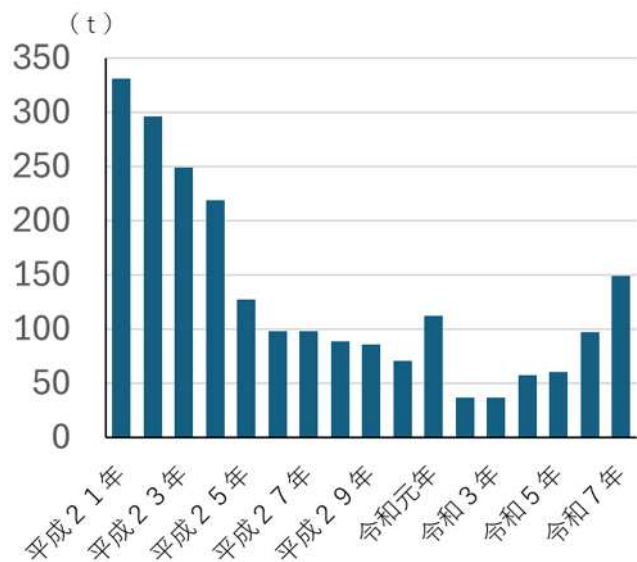
漁業管理課 主任 森田 将伍

大分県北東部の東国東地域でタチウオ漁に明るい兆しが広がっています。国東市で「くにさき銀たち」としてブランド化されているタチウオは、船を走らせながら釣るこぎ釣りによって漁獲されることで、身を傷つけず銀色に輝くタチウオを出荷しています。この地域で愛されるタチウオは、昭和59年をピークに減少傾向が続いていましたが、直近数年は回復傾向に転じています。東国東地区でタチウオ漁が盛んである、大分県漁業協同組合国見支店と姫島支店のタチウオ漁獲量の推移を右図に示しています。平成21年から減少傾向だった漁獲量が令和3年から増加傾向にあることがわかります。

タチウオ漁獲量の回復傾向の背景には、漁業者による資源管理の取組があります。資源管理措置として、大分県漁業協同組合で定める毎月第2土曜日の休漁12日間に加え、5月～8月の毎週土曜日14日間の合計26日の休漁を行っています。

漁獲量が回復傾向にある一方で、解決すべき課題もあります。まず1つ目が餌不足の問題です。タチウオ漁で使用できる餌は、イカナゴ、ドジョウと決まっており、現在イカナゴの不足が問題となっています。瀬戸内海でのイカナゴ不漁の影響から餌となるイカナゴが全く入手できない状況です。イカナゴの代替としてドジョウで操業していますが、漁業者からは「ドジョウよりイカナゴの方が食いがいい」との話をよく聞きます。タチウオ漁の回復に伴い、今後さらに餌不足が深刻となることが予想されます。2つ目にサメ類やサバフグといった有害生物による漁具の被害が発生していることです。水温が高くなっていく初夏ごろから海域にサメが出ることで、漁獲物であるタチウオや漁具の損害がでています。またサメ被害が少なくなってくる秋口からはサバフグによる漁具の被害がでています。物価高騰の影響から漁業者が使用する漁具や燃油も高騰しており、漁具の損傷が収入に与える影響が大きくなっています。

現在、東国東地区ではタチウオ漁を始める漁業者が増えている状況です。新規に漁業就業した方もタチウオ漁を始めしておりタチウオ漁の回復が浜の活気に繋がっています。浜の活気をさらに拡大していくためにも餌不足や有害生物への対策など関係機関との情報共有や他地区事例などを参考に問題解決に向け取り組んでいきたいと思います。



出典：大分県漁業協同組合 姫島支店、国見支店 調べ

図：大分県漁業協同組合姫島支店、国見支店のタチウオ漁獲量の推移



写真：釣りあげられたサメ

祝！第64回全国農林水産祭 浪井丸天水産 天皇杯受賞

南部振興局 農山漁村振興部 主任 竹尻 浩平

令和7年11月23日、晴天の明治神宮。第64回全国農林水産祭式典が開催され、天皇杯・内閣総理大臣賞・日本農林漁業振興会長賞受賞者への表彰式が行われました。3賞は、過去1年間の農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞した453点の中から、農産・蚕糸・園芸・畜産・林産・水産・多角経営・むらづくりの7部門に授与されます。また、女性部門については天皇杯を除いた2賞が授与されます。就任間もない鈴木憲和農林水産大臣から栄えある天皇杯を授与されたのは、大分県漁業協同組合下入津支店所属、浪井丸天水産(浪井大喜代表)です。大分県内での水産部門天皇杯受賞は、平成4年鶴見町漁協大島一本釣り組合、平成14年大分県漁協臼杵支店共同出荷組合以来23年ぶり3回目の快挙となりました。筆者も天皇杯を間近で見せて頂きましたが、日本最高峰の榮譽を象徴するきらびやかな輝きに、心奥底の琴線が力強く刺激されました。



表彰式の様子



天皇杯と賞状を手に笑顔の浪井夫妻

それでは、浪井丸天水産の取組について概要を紹介します。浪井丸天水産は、1978年に養殖業を開始。3代目となる現代表まで一貫してブリ養殖を行っています。現代表は、「養殖業者はブリの販売を商社に依存しており、販売価格は相場任せで生産者に決定権がない」ということに課題意識を持ち、「ブリの販売価格決定権を持ち、経営基盤を安定させる」という目標を立て、2019年に“若武者”ブランドを立ち上げました。主力商品の「若武者ハマチ」は「ブリより小型のハマチサイズでの出荷」、「餌にビール酵母を混ぜることで引き出された、上品な味わいや旨味の強さ」などの特徴があります。現代表には、「食べてさえもらえれば使ってもらえる」という自信があったのですが、営業活動はなかなかうまくいきません。営業活動の最中、マーケットには、フィレ加工や店舗規模に応じた出荷などニッチな需要があることに気がつきます。そこで、自社敷地内に加工場を整備、配送用車両も完備して、生産・加工・流通の自社一貫体制を確立。顧客の様々な需要に臨機応変に応え、いつでも最高の状態で若武者ハマチを届ける体制を構築しました。また、プロモーションにも力をいれ、SNS やホームページを駆使した効果的な営業活動を展開しています。これらの地道な営業努力により、相場に依存しない価格設定に成功。安定した経営を行っています。



「若武者ハマチ」



走る広告塔でもある配送用車両

また、3K イメージの強い養殖業のイメージを払拭するため、労働環境の改善にも取り組みました。Bluetooth 搭載の計量器や、タブレット型通信端末を導入し、出荷や給餌に係る負担を大幅に軽減。福利厚生制度の充実だけでなく、トレーニングジムやキッチンスタジオ、託児スペースを整備して従業員の満足度向上を図っています。これらの取組により若い従業員が定着。9人もの雇用を生みだし、その平均年齢は31歳の“若武者”集団です(天皇杯受賞時)。今後は、輸出を加速させるべく、アメリカ、韓国、台湾などへ代表自ら積極的な営業活動を展開しており、今後ますますの活躍が期待されています。



自社敷地内に整備されたトレーニングジム



自社敷地内に整備された託児スペース

まさしく飛ぶ鳥を落とす勢いで事業を順調に展開している浪井大喜代表ですが、ここまでの道のりは決して順風満帆というわけではありませんでした。代表就任当時はなかなか事業が軌道に乗らず、何度も養殖をやめようかと考えたそうです。諦めず、様々なチャレンジを続けた結果、今があります。その意味で、今回の受賞理由でも触れられていますが、「養殖業だけでなく漁船漁業も含めて地域のモデルとなりうる」のだと思います。

令和8年1月29日には、7部門の天皇杯受賞による天皇皇后両陛下への業績説明が皇居で行われました。両陛下からは、「特に苦勞されているのはどんな部分ですか?」、「従業員さんもみなさん充実されているでしょうね」といったお言葉があったようです。

この場をお借りして、今回の受賞について改めてお祝い申し上げます。本当におめでとうございます。



転入者紹介

～ よろしくお願ひします！～

《水産研究部》

【次長 平川 俊助】

(別府県税事務所から転入)

4月の定期異動で別府県税事務所から来ました平川俊助です。

試験研究機関での勤務は初めてなので、ご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、大分県水産業の発展のため、日々業務に取り組む職員の皆さんの支援をしっかりとてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

○管理担当

【課長補佐(総括) 和田 啓二】

(大分土木事務所から転入)

4月の定期異動で、大分土木事務所から転入しました和田啓二です。

農林水産部での勤務は初めてになります。総務的な業務も久しぶりなので、皆さんに色々教えてもらいながら水産研究部に少しでも貢献できたらと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

○資源増殖チーム

【主幹研究員 内海 訓弘】

(農林水産研究指導センター水産研究部北部水産グループから転入)

このたびの異動により、北部水産グループから水産研究部に参りました内海と申します。水産研究部での勤務は、5年ぶり3度目となります。今回は、資源増殖チームで栽培漁業・種苗放流の技術開発などを担当します。現場のみなさまのご協力をいただかないと成り立たない業務ですので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○養殖環境チーム

【研究員 原田 隼希】

(新規採用)

本年度より新規採用で水産研究部養殖環境チームに配属となりました、原田隼希と申します。出身は大分市です。ブリの生産技術開発や水産加工に関する業務を担当します。不慣れなことがあり、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、様々な方々の声に応えられるように精一杯努めてまいりますので、どうぞよろしくお願ひします。



《北部水産グループ》

○管理担当

【主査 柴原 佐保美】

(北部振興局から転入)

このたびの異動で管理担当になりました。県北出身で、幼いころからベタやエイ、シャコやエビザッコ等、豊前海の豊かな魚たちを大量摂取したおかげで今日まで健やかに育ちました。釣りも好きです。

管理業務を滞りなく行うことで大分県の水産研究に貢献できるよう、精一杯頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします

○資源増殖チーム

【主任研究員 田村勇司】

(東部振興局から転入)

この度、異動で東部振興局から北部水産グループへ配属となりました田村です。3年前に退職して、再任用の水産技術職員として引き続き現場に出ています。2013年4月に当時の浅海・内水面グループの浅海チームに配属されて3年間勤務して以来、豊後高田での勤務は約10年ぶりとなります。資源関係の業務を担当しますので、よろしくお願いいたします。

【主任研究員 大竹 周作】

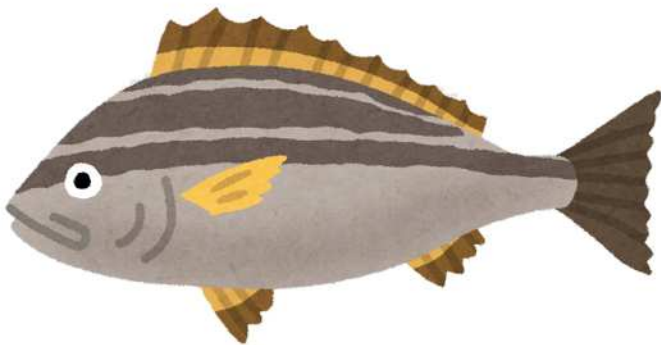
(漁業管理課から転入)

この度、異動で漁業管理課から北部水産グループへ配属となりました大竹です。研究に携わるのは、新規採用時に配属された水産研究部以来8年ぶり、北部水産グループで勤務するのは初めてとなります。カキ類の種苗生産や餌料培養等の技術開発を担当いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

【研究員 坪矢 拓海】

(新規採用)

この度、新規採用で北部水産グループ養殖環境チームに配属されました、坪矢拓海と申します。出身は大分県佐伯市です。大学では水産経済学を専攻しておりました。主に内水面、浅海定線調査を担当いたします。これまでの経験とは異なり、不慣れな点・未熟な点も多いと思いますが、大分県の水産業の発展に少しでも貢献できるよう日々努力いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。



令和8年度水産研究部・北部水産グループのスタッフ及び担当業務

水産研究部長 倉橋 賢二郎 次長 平川 俊助			
部 所	職 名	氏 名	主な担当業務
管理担当	課長補佐(総括)	和田 啓二	管理担当の総括、人材育成、県有財産管理、電子県庁関係事務
	主査	藤田 壮大	予算の調整・執行・決算、収入に関すること、出納事務、物品管理
漁業調査船 豊 洋	船長	平川 誠	調査船の総括、人材育成
	機関長	林田 健太	調査船の運航管理、機関の保守点検全般
	主任船舶技師	久保 隆	機関保守点検、海洋観測業務、調査器具使用・保守管理
	主任船舶技師	藤澤 芳宏	運行管理、無線通信業務、船舶検査関係等事務、調査器具使用・保守管理
	主任船舶技師	久保田 浩治	機関保守点検、海洋観測業務、調査器具使用・保守管理
	技師	長 田 彩	安全衛生担当業務、海洋観測業務、気象情報収集
企画指導担当	上席主幹研究員(総括)	木藪 仁和	企画指導担当の総括、調査研究成果のとりまとめ及び広報・外部評価
	研究員	亀田 崇史	予算編成、研修・視察・見学対応、その他企画調整
資源増殖チーム	上席主幹研究員(TL)	木本 圭輔	資源増殖チームの総括、人材育成
	主幹研究員	内海 訓弘	放流技術開発、クルマエビの資源生態調査、内水面の資源増殖
	主幹研究員	林 亨次	浮魚(アジ・サバ類)の資源・生態調査研究、資源に関する基礎調査
	主任研究員	田北 寛奈	ヒラメ育種、磯焼け対策・磯根資源
	主任研究員	真田 康広	タチウオ資源回復、資源動向調査(サワラ・トラフグ・ハモ)、標本船日誌調査
	研究員	伊丹 真実	気候変動影響調査、資源動向調査(イサキ、マダイ、ヒラメ)
	研究員	山本 桂伊	ブリ種苗生産及び育苗技術開発、種苗生産用餌料の培養技術開発
	研究員	渡邊 千夏	資源動向調査(マイワシ・カタクチ・ウルメ)、TAC調査、漁海況関連調査
養殖環境チーム	主幹研究員(TL)	堀 敏宏	養殖環境チームの総括、人材育成
	主幹研究員	西山 雅人	養殖漁場の環境調査及び適正管理推進、沿岸漁場の環境保全、漁場被害の防止
	主幹研究員	三吉 泰之	低コスト飼料・効率的養殖生産手法開発、疾病被害等調査、特定疾病等対策
	主任研究員	朝井 隆元	養殖生産物の食品安全衛生、養殖種苗の健全性確保、病原体の検出技術開発
	主任研究員	吉井 啓亮	ワクチン開発、ワクチン効果を高めるための技術開発、内水面の資源・生態(調査)
	研究員	毛利 文香	赤潮・貝毒の開始予察・防止技術査、漁場観測及び海況調査(浅海定線調査)
	研究員	原田 隼希	付加価値向上飼料開発、水産物品質保持技術等開発、スマート養殖生産技術開発
北部水産グループ長 宮村 和良			
管理担当	主査	紫原 佐保美	管理担当の総括、予算編成・執行及び決算、庁舎・県有財産等維持管理
資源増殖チーム	主幹研究員(TL)	都留 久美子	資源増殖チームの総括、人材育成、研究予算、研究成果普及、取水・排水施設に関すること
	主任研究員	徳光 俊二	タイラギ・アサリ種苗生産および増養殖技術開発、種苗生産施設維持管理
	主任研究員	大竹 周作	カキ類種苗生産および養殖指導、ハマグリ種苗生産技術開発、種苗生産用餌料培養
	主任研究員	田村 勇司	資源評価、アサリ資源調査および資源管理指導
	研究員	永田 みのり	放流効果調査、資源管理、沿岸漁業基盤整備事業関係調査
養殖環境チーム	主幹研究員(TL)	江頭 潤一	養殖環境チームの総括、人材育成、研究予算、研究成果普及、他機関との連絡調整
	主任研究員	伊藤 龍星	ヒジキ・テングサ類の増養殖、ノリ養殖技術、藻類の研究・指導
	研究員	村瀬 直哉	疾病診断・魚類防疫、内水面養殖技術普及、クルマエビ養殖の研究
	研究員	岡田 理	赤潮・貝毒調査、被害防止対策研究、漁場環境調査研究
	研究員	坪矢 拓海	浅海定線調査、内水面の資源・環境に関すること、カワウ・外来魚対策、スマート水産業技術開発
職員数39名(内訳 研究職27名 海事職6名 行政職員6名)			

ポスターの制作を通じて人権を尊重することの大切さを学びませんか？

令和8年度 人権ポスター募集

募集
期間

令和8年 7月1日(水) ~ 9月10日(木)

必着



大分県人権啓発イメージキャラクター
こころちゃん

令和7年度人権ポスター最優秀賞受賞作品



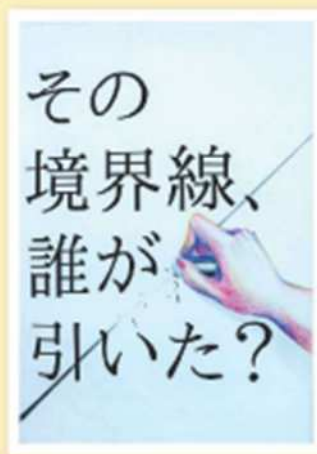
大分大学教育学部附属小学校 1年
西川 伶 さん



別府市立朝日小学校 6年
衛藤 直央斗 さん



国東市立安岐中学校 3年
井出 結月 さん



大分県立鶴崎工業高等学校 2年
谷本 茜 さん

主催 大分県、大分県教育委員会、大分県人権教育・啓発推進協議会

問い合わせ・応募先

大分県生活環境部人権尊重・部落差別解消推進課（大分市大手町3丁目1番1号）
TEL：097-506-3177 E-mail：a13710@pref.oita.lg.jp



▲ホームページ

人権に関する啓発資料 や 相談窓口 を ご活用ください

人権に関する相談窓口

大分県では、さまざまな人権に関する相談を、
随時受け付けています。お気軽にご相談ください。

受付時間：平日 8:30～17:15

TEL：097-506-3172

[大分県生活環境部 人権尊重・部落差別解消推進課]

LGBT等に関する相談窓口

受付時間：毎週 月・水・金曜日 19:00～22:00
※6月と3月は日曜日も相談実施

専用電話：070-4793-4407

LINEで友だち追加
→ チャットで相談



メール：madoguchi-oita13710@au.com

詳しくはこちら ▶



編集・発行者・連絡先

大分県農林水産研究指導センター 水産研究部

ホームページアドレス <http://www.pref.oita.jp/soshiki/15090/>

水産研究部
管理担当、企画指導担当
資源増殖チーム、養殖環境チーム

〒879-2602 佐伯市上浦大字津井浦 194-6
Tel: (0972) 32-2155 Fax: (0972) 32-2156
E-mail: a15090@pref.oita.lg.jp

水産研究部 北部水産グループ
管理担当
資源増殖チーム、養殖環境チーム

〒879-0608 豊後高田市呉崎 3386
Tel: (0978) 22-2405 Fax: (0978) 24-3061
E-mail: a15092@pref.oita.lg.jp